

【白雪姫】

1 プロローグ

最初は黒幕で舞台を閉じている。

{ナレーション}

むか〜し、むかし、白雪姫という、とてもかわいいお姫様がいました。しかし、ままははの女王はうぬぼれがつよく、いつかは姫が、自分より美しくなるのではないかと恐れていました。そして、毎日魔法の鏡にききます。

「魔法の鏡よ、この世で最高の美しさを持つものは誰か？」

そして鏡が、「あなたが最高です」と答えると、白雪姫は女王のひどいやきもちを受けずにすんでいました。

しかし・・・・・・・・・・。

[ナレーションが終わると同時に黒幕を開く]

2 じょおう まほう かがみ 女王と魔法の鏡 1

城の大広間にて、女王は魔法の鏡の前に立ち、話し掛ける。

【配置は図 1 参照】

じょおう 女王 「まほう かがみ魔法の鏡よ！ この世でさいこうのうつくしきをもつものはだれか？」

かがみ 鏡 「たしか確かに、じょおうさま女王様はうつくしい。しかし、いま今さいこうのうつくしきをもつものは、あなたのぎり むすめ義理の娘、しらゆきひめ白雪姫です」

じょおう 女王 いかりをこめて「しらゆきひめ白雪姫め〜・・・・・・・・!!」

[黒幕にて一度、舞台を閉じる]

{ナレーション}

魔法の鏡の言葉をきいて、しっとにかられた女王は、白雪姫を殺すことを決意します。そして、兵士をよびよせ、めいれいします。

[ナレーションが終わると同時に黒幕を開く]

3 じょおう 女王と へいし 兵士

2 と舞台は同じ【配置は図 2 参照】

女王が立っている。その前に兵士がひざまずいている。

じょおう 女王 「よいか、おまえは白雪姫しらゆきひめをもりにつれていき、そこで白雪姫をころすのです」

へいし 兵士 りょうて 両手を ひろげて 広げて こうぎ 抗議する。

「しかし、あんなかわいい姫ひめを」

じょおう 女王 て 手を ふりあげて 振り上げて

「おだまり!! もし、失敗しっばいしたらただではすみませんからね」

へいし 兵士 うなだれて、あきらめたように

「はい、わかりました。おおせのとおりにいたします」

[黒幕にて一度、舞台を閉じる]

{ナレーション}

兵士は命じられたとおりに白雪姫をもりのなかに連れてきました。そして、白雪姫の背後にしのびより、けんをふりかぶります。

[ナレーションが終わると同時に黒幕を開く]

4 白雪姫の暗殺未遂

もりのなかの舞台に移る。白雪姫が花をつんでいる後ろで兵士が周りを見回し、おもむろに剣を取り出し、振りかぶる。白雪姫はそこで後ろを振り返り、兵士に気づき、悲鳴をあげる。

【配置は図3参照】

しらゆきひめ
白雪姫 「きゃあ！」

兵士は剣をふりかぶった姿勢のまま、しばらく迷っているが、突然剣を放り出し、白雪姫の足元にひざまずく。

へいし
兵士 「だめです、私には出来ません。白雪姫お許しを・・・」

しらゆきひめ
白雪姫 「どういうことです？」

へいし
兵士 「あなたのうつくしさをねたんだ女王から、あなたを殺すよう
に命令されました。」

へいし
兵士 「今すぐ逃げなさい。たとえ今は平気でも、ここにいる限り、
いずれあなたは殺されてしまうでしょう。お逃げなさい。今
すぐ。早く。出来るだけ遠くに。絶対戻って来てはならな
い！」

その言葉に押されるように白雪姫は走り出し、舞台の外に行く。

[黒幕にて一度、舞台を閉じる]

5 小人達との生活

[黒幕は閉じたまま]

{ナレーション}

命からがら、女王からにげのびた白雪姫は、7人の小人の家にたどり着き、小人達にたすけられ、しばらくしあわせにくらしていました。しかし、そのしあわせも長くはつづかなかったのです。

6 じょおう まほう かがみ 女王と魔法の鏡 2

{ナレーション}

一方、城の中で、白雪姫が死んだとおもいこんだ女王は、再度魔法の鏡にたずねます。

[ナレーションが終わると同時に黒幕を開く]

【配置は図1参照】

じょおう 女王 「まほう かがみ魔法の鏡よ！ この世でさいこうのうつくしさをもつものはだれか？」

かがみ 鏡 「今このとき、さいこうのうつくしさをもつものは、しらゆきひめ白雪姫です。」

じょおう 女王 「しらゆきひめ白雪姫はもりのなかで死んだはず。」

かがみ 鏡 「しらゆきひめ白雪姫は生きております。この世でさいこうのうつくしさをたもったまま」

じょおう 女王 「なに！ わたしとだますとは・・・」

[黒幕にて一度、舞台を閉じる]

{ナレーション}

他人を信じることが出来ないとかんがえた女王は、自分がへんそうし、白雪姫に毒を飲ませることをかんがえつきます。そして・・・

[ナレーションが終わると同時に黒幕を開く]

【配置は図 4 参照】

魔女 「これならば、だれもわたしの^{しょうたい}正体にきづくまい。」

^{ふところ}懐から、りんごを^{とりだし}取り出し

「そして、このりんごを^{しらゆきひめ}白雪姫が^{たべれば}食べれば、^{こんど}今度こそ私

が国一番・・・ヒャーヒェヒェヒェ・・・」

[黒幕にて一度、舞台を閉じる]

7 白雪姫とりんごの毒

【ナレーション】

小人の家で白雪姫は幸せに暮らしていました。しかし、そこに女王の変装した魔女が現れたのです。

[ナレーションが終わると同時に黒幕を開く]

【配置は図 5 参照】

魔女 白雪姫の後ろから声をかける

^{ひとり}「一人かい、かわいこちゃん？」

^{しらゆきひめ}白雪姫 振り返って

「そうですけど・・・」

魔女 ^{まわり みまわして}
周りを見回して

「そうかい、じゃ～おじょうさんはきれいじゃからどんな

^{ねがい} 願いもかなえる ^{まほう} 魔法のりんごをあげよう」

^{しらゆきひめ}
白雪姫 「まあ、ありがとう」

魔女 「さあ、^{なにかねがってひとくちおたべ}何か願って一口お食べ。」

^{しらゆきひめ} ^{ひとくち} ^{たべる}
白雪姫 一口りんごを食べる

「ああ、^{へん きもち}なんだか変な気持ち……」

そして^{しらゆきひめ}白雪姫はたおれます。

魔女 「いいよ、その^{ちょうし}調子。もうすぐ息が^{いき とまる}止まるだろう。そして、

^{わたし} ^{くにいちばん} ^{ははははははは}
私が国一番。ハハハハハハハ……」

[黒幕にて一度、舞台を閉じる]

{ナレーション}

白雪姫は永遠の眠りについてしまいました。魔女は小人の家からにげだし森の中へと逃げますが、そこに小人達がかえってきます。

[ナレーションが終わると同時に黒幕を開く]

【配置は図6参照】

^{こびと}
小人 小人達は背景の後ろから飛び込んでくる

「あ！ ^{まじよ} ^{しらゆきひめ} 魔女が白雪姫を!!」

魔女は逃げる。小人達が追う。

がけの上まで追い詰めたところで、魔女が大岩を転がそうとする。

魔女 「おせっかいな小人どもめ。見ておいで、骨のずいまでこなごなにしてやる。」

と、大岩を持ち上げて小人に向かって投げ下ろそうとする。

しかし、そのとき雷が鳴る(クラッカーなどで鳴らす)

小人 「ああ！雷が!!」

そして魔女はバランスを崩し、「ああ～!!」と声を上げ倒れ、大岩の下敷きになる。

[黒幕にて一度、舞台を閉じる]

8 エピローグ

【配置は図7参照】

白雪姫は仰向けでガラスのひつぎの中に横たわっている。

{ナレーション}

死んでもひととき美しい白雪姫を小人たちは土の中にとても埋める気にはなれませんでした。小人たちは、ガラスと金で作った棺に納めていつもそばでお祈りしていました。そのうちに王子がガラスの棺の中で眠っているという、美しい乙女の話をつと耳にしたのです……。 (王子は、このあたりから、舞台に現れる)

王子が森の中を探索していると、ガラスの棺に入れられて横たわる白雪姫を王子が見つけます。そして、魔法の毒を消す唯一の方法である口付けをかわすと、白雪姫は目覚め、その後、王子とお城にて幸せに暮らしました。めでたしめでたし……。

(ここまでナレーション)

王子役の方はナレーションに合わせ、白雪姫にキスをするまねをして、目覚めた白雪姫を起こし、いっしょに立ち上がって(図8参照)観客のほうに向く。(ここで、《めでたしめでたし》と入る)そしたら、劇に出演した人は全員横一列に並び(図9参照)、ナレーターから一人一人紹介をされながらお辞儀をしていく。最後にご清聴ありがとうございましたといたら、全員で礼をして、終劇となる。